

中井正一「委員会の論理」と コミュニケーション史の構想（続）

中 村 保 彦

1. 前稿からの課題

1. 1 前稿の要点および補足

筆者は、前稿において「委員会の論理」が自らの関心に即して今どう読み込めるのかという「読み」の可能性にむけて準備作業を提示した。特に、中井が「委員会の論理」において展開したコミュニケーション論は、独自の歴史意識に基づいた弁証法的なコミュニケーション史的構想だと評価し、コミュニケーション史の視点から「委員会の論理」再考のための前提作業を行った。本稿はそれを受け「委員会の論理」の内容展開と関連する諸論文について扱う。さらに、「委員会の論理」下降図式（第16節）において、従来、議論点となっている言語と主体性の概念などに言及しながら「委員会の論理」の可能性を論じたい。なお、この節は、本稿の引き継ぐべき課題を明確にするため、前稿の要点を整理して提示する。そして、前稿に言及しなかった関連文献や論点も追加して補足する。

まず、中井の「委員会の論理」他諸論文には、独自のコミュニケーション史の視点があると評価する鶴見俊輔の論に依拠した。すなわち、『ドイツ・イデオロギー』他、マルクスの著作に現れる「交通」(Verkehr) の概念に精神的交通も含まれており、中井はそれらの著作から影響を受けているとする説に与した(鶴見 1975、香内 1971)。また、後藤和彦が「委員会の論理」を「現代のリーズニング(論理)のためのコミュニケーションのタイプ」として、表面的・図式的に取り上げた点も言及した(後藤 1973)。さらに、中井によるコミュニケーション論のスケッチともいえるべき「委員会の論理」(江藤文夫 1973)が、いかなる時代に執筆されたのか、マスメディアとの関係において見た。特に、モダニズムの影響を受けた世相、インテリ・民衆の「自由」のあり方の違い、1930年代のマスメディア状況などを概観した。また、中井に関する先駆的な論者の一人、稲葉三千男は、「委員会の論理」を軍国主義時代まっただなかの「奴隷の言葉でしか語ることが許されなかった時代」の著述だから論述の展開過程を辿ることが難しく紙背を

読む努力が要るとして、執筆された時代や文体・言葉の選択との関連を述べている（稲葉 1989 10-11）。なお、前稿においては、山本武利の論考（山本 1994）を中心に引用した。

そして、「委員会の論理」の内容展開や使用されている概念・表現に注目して、従来の中井論が引用・言及している文章も参考にその形成過程を述べた。すなわち、「委員会の論理」は、それより前に執筆された諸論文、並行して執筆されたと考えられる「講座芸術学」と有機的に関係していること。また、戦後に執筆された諸論文や『美学入門』には、中井が「委員会の論理」執筆後に吸収したと思われる知識や考え方が追加され文体もかなり変更したせいか、わかりやすい表現になっている。それゆえ、中井が主張したかった「委員会」とその「論理」の全貌は、草稿としての「委員会の論理」単独のテキストからは把握し難く、むしろ前後する諸論文群を含めて推測する方法が有効と考える。なお、中井の文体は「聴衆^{ゼロ}の講演会」時点の反省からか、「委員会の論理」の文体と戦後執筆の文体とは大きく変わっている。文体が変わるということは、思想家として変わることを意味する。この点に関しては、次章に述べる。それから、「委員会の論理」とコミュニケーション史との関係から、中井自身の戦前期における活動全般を評価した。具体的には、鶴見俊輔らが「ルソーのコミュニケーション論」に提示した「コミュニケーション・クリティック」という概念を援用して、中井自身の位置が、日本の1930年代の閉塞的なコミュニケーション状況における「コミュニケーション・クリティック」だと述べ、本稿が扱うべき課題を提示した。

1. 2 コミュニケーションと「交通」概念

中井が「戸坂君の追憶」（『中井正一全集』1 収）に書いている戸坂潤（1900-1945）は、同じく京都帝国大学文学部に学んだ親しい論敵だった。この「追憶」は、戦後に書かれたものだが、まだ、戸坂が「京都の学会に入れられず、空しく、京都を放逐さるる」前の時代、中井は、精緻な堂々とした論理をもって臨む戸坂との「頬の熱するまでの polemik」を实になつかしかつたとその懐いを述べている。唯物論の観点を選んだ戸坂は、「委員会の論理」が連載される前年に『日本イデオロギー論』（白揚社 1935、増補版 1936）を上梓した。その「序」にこう書いている（戸坂 1966-2 225）。

この論述に『日本イデオロギー論』という名をつけたのは、マルクスが（中略）ドイツに於ける諸思想を批判するに際して、之を『ドイツ・イデオロギー』と呼んだのに倣った（下略）。

この『日本イデオロギー論』には「現代日本に於ける日本主義・ファシズム・自由主義・思想の批判」という副題が付されている。それゆえ、この書物こそ日本版『ドイツ・イデオロギー』といえるものかもしれない。確かに、『日本イデオロギー論』は著作の目

的や「イデオロギー」批判のスタイルといった点において『ドイツ・イデオロギー』を念頭に置いて執筆したように読める。しかし、戸坂のこの書物は、マルクスが頻繁に使用した「交通」という用語、精神的交通を含んだ「交通」概念を扱ってはいない。むしろ、『ドイツ・イデオロギー』の影響を受けて交通概念からヒントを得たのは、戸坂が『日本イデオロギー論』において批判し、中井も「合理主義の問題」（全集1 123-142）に批判的な言及（風土論の批判）をしている和辻哲郎（1889-1960）の方だろう（和辻 1951, 1963）。いずれにせよ、戸坂が「社会的精神的交通」として交通概念を扱っているのは、『日本イデオロギー論』の前年に著わした『現代哲学講話』（白揚社 1934）においてだ。戸坂は、その第三篇に「ジャーナリズム（新聞）現象」を理論的な視点から論じている（戸坂 1966-3 130）。彼のジャーナリズム論は、新聞現象を扱った先駆的な論として興味深いのだが、中井のように言語論・コミュニケーション論的な交通概念の扱いとは異なっている。なお、20世紀に入った当時、日本の思想界に『ドイツ・イデオロギー』が与えた影響は推測の域を越えないけれども、たとえば、三木清（1897-1945）が訳した『ドイッチェ・イデオロギー』（岩波文庫）は1930年に発行されている。また、戦後の岩波文庫『ドイツ・イデオロギー』訳者、古在由重（1901-1990）は、丸山眞男（1914-1996）との対話において1928年頃にリャザノフ編のドイツ版アルヒーフを読んだと述懐している（古在、丸山 2002 38）。これも、本稿の議論点から外れるため深く言及しない。

『ドイツ・イデオロギー』（1845-46）の段階におけるマルクスの交通概念が精神的な交通を含むとする観点は、香内三郎（香内 1971）の定義を引用して前稿に述べた。香内の定義は1970年代の著述と、現在から見てやや古い。その後、交通概念の展開を述べたものに、マルクス主義的な社会学の観点から田中義久の定義がある（田中 1997）。田中によると、「交通」（独 *Verkehr*, 英 *intercourse*）は、輸送・流通という即自的な交通（*transportation*）とは違い、社会諸関係のアンサンブルを流動と運動の過程においてとらえる理論的な概念だとする。そして、今日の関係主義の視点から、交通とは、諸個人の行為（*action*）の相互性のなかから相互行為（*interaction*）が生成し、そこから社会関係（*social relation*）が形成されてくる行為＝関係過程そのものを示す概念だとする。つまり、マルクスの交通概念には、経済的社会関係の形成へ向かう行為＝関係過程と同時に、コミュニケーション行為から〈文化的〉社会関係の形成へという行為＝関係過程も含まれていた。本稿は、田中が展開した定義に即して、交通概念にはコミュニケーション行為・関係過程が含まれているという観点から「委員会の論理」を再考していきたい。

2. 「委員会の論理」のテキスト

2. 1 資料批判の問題

雑誌『世界文化』に掲載された「委員会の論理」のテキストと戦後に編集・発行された『中井正一全集』収録の「委員会の論理」テキスト（全集1 46-108）との違いに関しては、従来、疑問が提示されている。しかし、「委員会の論理」を収録しているいくつかの著作・論集は、論述展開過程の根幹に影響はないと考えたのか概ね全集を底本に使っているようだ。

この点に関して、1990年代に中井を論じた木下長宏は、1970年代に作られた中井像を批判し、従来の中井論が文体の問題を軽視しているという。すなわち、「旧字・旧仮名づかいを現代風に改めたのは判るが漢字を大胆に少なくし読点を増やしたりしている」点などを取り上げて、「中井正一の文体の息づかい」が違ってくると批判している（木下 1995 247）。前章に言及した、文体が変わるということは、本来、思想家として変わることを意味する。中井の文章における語彙・語感・文体など文章のスタイルが戦中と戦後を比べて大きく変わっているのは、その証左といえよう。もっとも、木下自身、『世界文化』掲載の「委員会の論理」原論文から如何なる「読み」が可能なのか提示してはいない。しかし、歴史的な史料批判の観点からいうなら、一人の思想家の全集にテキストを収録する際、そのような改変が行われるのは問題だろう。もちろん、編集に際しての諸事情を詮索しても意味がない。けれども、『中井正一全集』（全4巻、美術出版社、1964-1981）は、たとえば、中井とほぼ同時期に活躍し執筆活動を行った三木清（『三木清全集』全19巻、岩波書店、1966-1986）や戸坂潤（『戸坂潤全集』全6巻、勁草書房、1966-1979）の全集と比べて、木下が批判したように資料批判の観点が弱いと感じる。中井の全集が完結してから30年経過している現在、遺漏のある文章も収録し直し資料批判を経た増補版の刊行を期待したい。

ただし、それら資料批判の欠点とは別に、今、読書の位相という点から注目したいのは、「読み」の身体性に関する問題だ。なお、木下は、それに関連して別途、和歌の連綿体を取り上げて「韻律」の問題を論じている（木下 2006）。一見、文体の問題とは無関係に思える木下の「韻律」論を細かく取り上げる余裕はないのだが、次節に「読み」の身体性の問題を読者概念と絡めながら言及しておきたい。

2. 2 読みの身体性と読者

現代の通念としての「読者」概念に関して、日常生活に埋め込まれた消費的な読書という印象に隠蔽されているせいか、人々はその歴史性を意識していないようだ。筆者はかつて、読者概念はマスコミュニケーション理論の図式から無意識的に採用された概念

だと論じたことがあった（中村 1991）。すなわち、読者とはジャーナリズムが対象とする一般の不特定多数の書物を読む人々を意味し、読者の成立にはジャーナリズムおよびそれと相即的に存在するマスメディアが前提としてある。中井も「委員会の論理」第2節に、読者と関係する時代・論理について触れている。まず、活字の「印刷される論理」の発生とタルドの“publicum”（public：メディアを媒介として結合する公衆）概念を取り上げる。すなわち、言語意味（中井の文中表現）は「活字となって公衆の中に言葉が手渡しされ」、公衆は「各々異なった周囲の情勢にしたがって」自由に意味を読み取ることが可能になる。そして、言語意味の自由な読み取りが、活字の印刷物によって与えられ「ジャーナリズムなる新たな公衆性が生じ」、新聞がなかったらフランス革命は起こらなかっただろう、というユゴーの言葉を引いて説明する（中井 1936, 1 7）。要は、ジャーナリズムと読者成立の歴史性に関して同じことをいっているのだが、注意すべき点の一つがある。言語意味の自由な読み取りを可能にした活字の印刷物は、発生起源として通信伝達モデルにいう情報の「送り手－受け手」間の一義的なコミュニケーションを前提としていない点だ。前稿に批判したシャノンやウィーバーらの情報理論、「送り手－受け手」モデルが、逆にノイズを排除した一義的なコミュニケーションという発想枠組を提示したのだから当然といえる。この点は、「文書」（手紙含む）と「書物」を比べてみると判りやすい。たとえば、古文書学における古文書の定義を参考にすると、古文書は、歴史史料の物的遺物のうち、文字文章の記載そのものに史料価値がある文献の一部であり、特定の対象に伝達する意志をもってする意思表示のために作成された手段をいう（佐藤 1971 1）。つまり、特定の者（送り手）が特定の者（受け手）に対して発信した意志表示の文献を古文書という。したがって、古文書こそ情報の「送り手－受け手」間の一義的なコミュニケーションを前提とした手段、媒体だといえる。しかも、それは「授受者間の関係の如何によって古文書の材料・作成手続・様式・文章などのうえにいろいろの差異があらわれる」（佐藤 1971 2）。古文書は、時代や形式において様々な差異が発生するけれども、受け手による意味の自由な読み取りは許されていない。原則として、古文書が授受者間の一義的なコミュニケーション・メディアなのに比べ、パンフレットや新聞・書物といった「印刷される論理」を表現した印刷物は一義的なコミュニケーションを前提にしていない。書物は、むしろ、中井がいうように読者の「言語意味の自由な読み取り」が可能なメディアとして成立してきた。それは、書物の内容的な形態からも判る。文書と違って、書物には（特に専門書、事典など）目次・索引が付されており、巻・章・節といった情報の結節点が構造上に用意されている点だ。これら形態的な特徴の書誌学的な議論は別として、読者は、書物が備えている形態上の特徴に誘われて、「見る－読む」身体的な行為としての読書に入り易くなる（マンガエル 1999）。

書物、読書行為、「読み」の身体性については、すでに、西欧読書史・書物史において、セルトー (Certeau, Michel de, 1925-1986) やシャルチエ (Chartier, Roger) らの学問的な蓄積がある (セルトー 1987、シャルチエ 1992, 2000)。これも本稿の目的から外れるゆえ詳しい言及は避ける。ただし、「委員会の論理」該当節の内容をイメージしやすくするため、シャルチエが論じている読書行為の歴史に関する要点を提示しておきたい。まず、従来の文化史における書物の存在、どこの誰が持っている (possession) といった財の配置についての議論を批判する。そして、書物など文化的な価値をもつ事物が、メッセージの受容といった側面に限らず、どのように読まれ使用されたかといった、意味の生産過程を把握するために「領有」(appropriation) 概念を提示した。すなわち、従来の読書・読者論は、

- ①テキスト：書誌学が対象とする。文体の問題もこれに属する
- ②書物：テキストを載せる器としての構造・形態
(活字、組版、ノンブル・章立て、など)
- ③読書：読書技術・能力の多様性、個別性
(例：読めるが書けない人々、識字率によって表現困難)

といった別々の要素を個別に論じているため、これら三つの要素が複雑に絡まって制約される読者の姿や「読み」の世界を把握していないという。つまり、読書は単なる抽象化作業と違って身体性を伴う、意味を創造する主体的な行為だとする。なお、別稿 (中村 2008, 2009) に論じた財の配置量を競争する現代世界の図書館における問題、リテラシー概念に替えて基本的潜在能力 (A. セン) への注目、さらに、読者層による位相差および空間・時間の確保といった問題は、シャルチエが主張する領有概念と関連する。それゆえ、従来の書物史が財産目録などの調査を元にした財の配置および書物という財の議論だったという事情は、シャルチエが批判したような陥穽をもつ。その事情と陥穽は、図書館史 (目録史を含む) の書物や読書・読者に関する叙述においても同様だろう。上記、「委員会の論理」が中井の該博な西欧思想の知識を背景としている点から、あえて、シャルチエら西欧読書史の要点を援用した。ただし、シャルチエらの議論は、通常、フランス社会史の系統に属しており、議論を援用する際には注意を要する点がある。それは、別稿 (中村 2009) が言及した読者層の階層あるいは階級差の問題、無文字社会における「リテラシー」概念の有効性、さらに、時代によっては国家 (権力) との関係性を捨象してしまう点だ。西欧の歴史的な社会においても読書・読者像の全体を把握するためには、歴史的に規定された様々な属性・要素を前提としなければならない。

3. 「委員会の論理」とその可能性

3. 1 内容展開と構成

この節は、「委員会の論理」の内容展開を下記、『世界文化』連載時のまとまり（上・中・下篇）に即して要約的に辿り、その構成と特徴を概観する（『世界文化』同人1975）。ただし、上・中篇は、論理学史のスタイルを取りつつ、当時の「19世紀型学知」を前提とした西欧思想史のような内容展開になっているため要約し難い。したがって、なるべく冗長性を避けるよう努めながら、各篇・節の要点を中心に辿ることとする。

「委員会の論理（上）」第1節～第5節（『世界文化』13号、1936年1月号収）

「委員会の論理（中）」第6節～第9節（『世界文化』14号、1936年2月号収）

「委員会の論理（下）」第10節～第16節（『世界文化』15号、1936年3月号収）

なお、『世界文化』連載時のまとまりに依拠する有効性は二つある。一つは、木下長宏が批判したように、全集収録の文章は『世界文化』連載時のものと比べて改変が加えられ遺漏が多いという点だ（木下 1995）。それゆえ、送り仮名や繰り返し記号などを除き、引用は原則として『世界文化』（復刻版）の文章に従う。もう一つは、様々な論稿が掲載された「雑誌」当該号が号全体として持っている編集的な情報をつかめる点だ。電子ジャーナルの編集・発行形態が隆盛になりつつある現在、雑誌の資料的な意味も変貌しつつあるのだが、通常、紙媒体の雑誌に収録された各論文・記事は、当該号の構成、特集、他論文や記事全体との関係においてある種の意味をもつ。また、商業的な雑誌なら、広告も社会学や歴史学の貴重な資料となる。つまり、どういう特集に絡めた論文なのか、掲載順序は巻頭にあるのか、他の論文・記事に誰の何に関する文章が載っているのか等、編集行為に関係した各号の全体がもつ意味、情報がある。これは、編集行為を経たパッケージ型の継続する刊行物（逐次刊行物）にとって当然のことだが、一般的な読者には意識され難い。この点に注目したのが、葛西弘隆の論考だろう（葛西 2009）。葛西は、「委員会の論理」（中・下）が掲載された『世界文化』14号、15号等に、松尾史郎（久野収のペンネーム）が訳したホルクハイマー（Horkheimer, Max 1895-1973）の論文が掲載されている点に注目する（久野 1974）。そして、編集の中心だった中井自身が同時代のホルクハイマーの合理論に影響を受けただろうとの推測から、ホルクハイマーの合理主義論争と中井の合理主義の捉え方を比べて論じている。実際、「合理主義の問題」（『学生評論』1937年3月号、全集1収）の中心となる記述は、「委員会の論理」上篇（『世界文化』13号、1936年1月号）、後半の記述とかなり重複している。「合理主義の問題」は、「委員会の論理」の該当する内容を別途、論じなおしたように読み取れるのだが、この論文が1937年3月という日中戦争直前の時期に発表されたことから推測するなら、「ファシズム激化の時局に対する理論的抵抗線を彼なりに固めようとしたもの」と捉えるのが

妥当だろう（郡 1966 143）。全集版の「委員会の論理」だけを完全稿のように見ていたら気がつかない点だといえる。

まず、「委員会の論理（上）」（1～5節）について。『世界文化』13号（1936年1月号）の表紙を見ると、中井の「委員会の論理（上）」は巻頭論文の位置にある。「世界文化情報」欄には、「第十三回国際ペンクラブ大会」松尾（久野収）や「ドイツ新聞界の委縮」瀬津（瀬津正志＝ねずまさし）といった記事が見られる。そして、中井は、巻頭論文の第1節を論理学における「論理」概念の不明確さから始める。すなわち、

論理そのものの概念規定は、自らハッキリしているとは云えない。多くの区別されなければならないものが、混雑して論理と云う言葉の中に盛り込まれている様に思われる。

と基本的な問題を提示する。論理学は言葉を精緻に扱う学にも拘わらず、「論理」という言葉の概念自体が曖昧だ。本来、「論理なる言葉及現象形態が、いろいろの文化推移の中にいるんな」役目をもっていたはずだが、「厳とした特別な世界を構成しているものとして取り上げられることによって、強いて一様化されている」。つまり、「論理」は今や、歴史や文化を越えて常に成立する普遍的なものとして扱われている。しかし、このような普遍性は如何にして発見されたか不問に付されたままだ。それゆえ、論理が一様化され「永遠の世界を支配している」とする考え方の基礎、正当性の限界、「合理性を真に合理性たらしめる文化的現象への見透し」を考えるべきだと述べる。今日、「論理」という言葉は、論理＝真理と置き換えても不思議ではないほどの位置にある（木下1995）。論理という言葉がもつ支配的な「力」に関しては、「論理的な思考力」とか「文章の説得的な論理展開」といった現代の用例を想像してみると判りやすい。現代において、論理の欠如は虚言もしくは妄言の如き扱いを受け非難される。だが、中井は、論理という言葉の歴史性に関して、西欧形而上学の始原から「言葉－概念」のあり方を問うべきだとする。そして、具体的に論理のギリシャ的段階をプラトンの『パイドロス』（「書き言葉」批判と「話し言葉」称揚）から始めている。すなわち、「人々をして論服せしめるための合理性」＝「いう言葉」の合理性を、「街の広場が論理の発生の酵母となっている」点と合わせて注意すべきだとして、古代ギリシャ人が欲した「いう形態における論理」を「いわれる論理」と仮称する。中井は、「書く言葉」はギリシャにおいてはバルバロイ（野蛮人）の仕事であり、「ポイニケーの符牒」（フェニキア人のしるし・ことば）であって軽蔑の対象だったと述べる。第一節に展開する「論理のギリシャ的段階」に関して、彼は「言語」という論文（『哲学研究』1927年9月号、1928年4月号、全集1 209-249）に詳しく論じている。特に、ブチャー（Butcher, Samuel Henry, 1850-1910）の『希臘天才の諸相』を引用して（ブチャー 1923）、

「話されたる言葉」から「書かれた言葉」への過程は、「書かれた言葉」から「印

刷された言葉」への過渡よりも想像力にとっていっそう驚くべきことであり、その結果においていっそう革命的であった（下略）。

と述べている。中井の記述は、ブチャーの論に引き付けられすぎている感があり、今日の西欧史・言語史における学問的な成果からすると、様々な異論がありうるだろう。しかし、前稿に触れた「19世紀型学知」の限界を批判してみても意味がない。まず、「委員会の論理」には、彼がすでに執筆した言語論の要点が凝縮されている点に注意したい。さらに、アリストテレス『レトリック』（修辞論）の三段論法、『トピカ』の弁証法的論理に言及する。中井が影響を受けた思想家の一人、カッシーラー（Cassirer, Ernst 1874-1945）の『実体概念と関数概念』がアリストテレス論理学から始まっていることを思うと、同様の導入部は興味深い（カッシーラー 1979）。第2節、アリストテレスのトポスの概念から、中井にとって重要な媒介（Mittel）・媒体（Medium）概念が論じられるのだが今は深入りしない。次に、ラテン語の“temples”から中世の瞑想（Kontemplation）の世界、根底に神学的合理主義がある世界においては、羊皮紙に書かれた一つの言葉に関して「一方的な一義的な意味志向が要求される。ここに「書かれる論理」が生じてくる。つまり、中世における瞑想の世界の言葉は、他者との対話による「いわれる論理」から書かれた言葉による一義的・閉鎖的な「書かれる論理」の言葉へと変わっていく。しかし、2節後半、タルドの公衆概念が現わす「印刷される論理」が生じてくる。すなわち、「交通の発達と商業の勃興が、紙と印刷の術」をあらゆるところにまき散らした結果、“Kontemplation”の言語意味を根底から変えはじめたという。

この1500年代、ルネッサンスにおいては、“Kontemplation”の言葉の中に、懐疑的・観察的な見る人が創造され、“subjectum”の意味が根底に横たわる者＝主体を表していたのが、観察する者＝主観に変わっていく。そして、言葉の意味は、「書かれる論理」の一義的な意味志向から、公衆の様々な異なった生活や周囲の情勢にしたがって自由な意味付与が可能になる。それは、「いわれる論理」における対話とは異なる、ジャーナリズムの対話性、一対多の対話性の成立といえる。中井は2節後半に、このような事態を商業的市民主義の段階における「活字的な思惟形態」の発生として、ベーコン（Bacon, Francis）の『ノーヴム・オルガヌム』を引きながら説明している。第3節、イギリスやフランスと比べ、統一国家の形成が遅れたドイツのロマン派に関して、ショーペンハウアー、ライプニッツ、フィヒテ、ハイネ、シュレーゲル、カント、ヘーゲル、など多数の思想家に言及しながら述べる。ヘーゲル左派からマルキシズムの「生産の論理」にも少し言及している。第4節、論理学のジグヴァルト、ロッツエ、集合論のカントル、『算術の哲学』からスタートしたフッサール、『幾何学原理』（『幾何学の基礎』1899）のヒルベルト、アインシュタインや彼の相対性理論に数学的基礎を与えたH. ミンコフスキ、

新カント派のマルブルク学派を形成したナトルプ、相対性理論のアインシュタイン、論理実証主義の代表的思想家カルナップ、『存在と時間』のハイデガーなどに言及し、論理学史スタイルの華々しい叙述が続く。結論として、ギリシャ・ソクラテスの時代、論理が一般大衆の論理だったのが、一般大衆から遊離し、論理学も専門化して特殊な高度なものに変貌したとする。それと同時に、「概念」も大衆から疎外される構造をもってきたと述べる。さらに、ヒルベルトやカルナップらの「論理(学)」が「専門的函数化」し、それを嘲うことが難しいのは、「論理そのものが無方向な函数化を自ら暴露している」ゆえだ、と問題状況を提示する。そして、その問題状況を如何なる合理的の形態をもって乗り越えるのかと問い、道標となる「委員会の論理」につなげる。さらに、第5節は、1～4節のまとめを提示する。各段階の「いわれる論理」(論争)、「書かれる論理」(思惟)、「印刷される論理」(実践・技術・生産)が「委員会の論理」の基礎工事だとする。すなわち、

現今私たちが合理性に対して用いている凡ての言語形態は、これ等の凡ての論理のプラス面とマイナス面をもちつつ、現存しているからである。そして、各々の論理のもつ「否定」の意味は、そのままの構造をもって、委員会の論理機構の骨組みを構成するのである。(中略)かくして、各論理の段階機構がそのまま他のものに転化するならば、そこに「委員会の論理」の基礎となるのであって、その各々の否定性の類型は、そこに巨大な弁証法的否定を表現する(下略)(『世界文化』13 p.17)として、各文化段階における合理性の性格を特徴づけ、「委員会の論理」の合理性に関して今日、有名となった図式を提示する。上篇の特徴は、「委員会の論理」(仮説)を提示するに際して、各時代・文化段階(ただし、西欧世界に限定)における論理がコミュニケーション史(メディアー言葉)との関係において論じられている点にある。それは、従来の思想史にはなかった動的な「歴史の弁証法」(辻部政太郎)だといえる。ただし、この上篇に展開された古代ギリシャの捉え方、特に、中井の歴史観が“バルバロイ”に象徴されるような自民族中心主義、西洋中心主義の歴史叙述の影響下にある点などは、前稿に言及した「19世紀型学知」の限界として回避しえなかったとはいえ、今日の西洋世界に関する歴史学・思想史の成果から批判的に捉え返すべき問題点が多くある。これも本稿が扱う範囲外のため深入りしない。

次に「委員会の論理(中)」(6～9節)の内容を見る。『世界文化』14号(1936年2月号)の表紙、巻頭に「フランス百科全書家研究序説」新村猛。「委員会の論理(中)」はその次に掲載されている。また、前述したホルクハイマーの「現代哲学に於ける合理主義論争」松尾史郎訳述、が中井の左に並ぶ。第6節は、上篇(前号)に述べた「委員会の論理」の図式を再提示し補足説明している。すなわち、図式における「論理は、常に一つの制度の崩壊とそのほかのものによる再編成とによる危機において、何らかの特

有な」役を演じているのだという。さらに、中井は次のように続ける。

論理自らが裂目に於ける生けるラチオとなっているのを、即自らが媒介と成っているのを見るのである。その各段階の凡ての合理性は、自ら獨異な新しい様相をもつと共に、自らの中に前に獲た凡ての合理性を他のものに転換することで而も自らのものとして保持して来たのである。（『世界文化』14 p.16-17）

次に、第7節は、ライナッハの『市民法のアプリオリとしての基礎づけ』に論じられている「確信」と「主張」を取り上げる。中井は「論理」（言葉）における「確信」と「主張」という二つの区別すべきものを説明しているのだが、いわゆる「ライナッハの否定論」に関しては、前稿に言及した「意味の拡張方向ならびにその悲劇性」（全集1 264-274）や「発言形態と聴取形態ならびにその芸術的展望」（全集1 250-263）を参考にすると判りやすい。それは、これらの論稿において、言語の問題と対峙し探求した中井の成果が「委員会の論理」中篇に凝縮されているからだ。すなわち、中井が1920年代の言語論において未完に終わった課題は、「ある社会の構成員のなかで同意を実現するための具体的な過程での言語のありかたを、しかも集団の思惟にたいする批判作業として明らかにすることだった」（池田 1988 273）。彼が「言語」他の論文に展開した言語の歴史的な三形態、「いわれる言葉」、「書かれる言葉」、「印刷せる言葉」は、この「委員会の論理」において、「いわれる論理」、「書かれる論理」、「印刷される論理」として引き継がれている。ただし、詳しく引用する紙幅はなく要点だけを見る。個人の内面的な「確信」は、他人との関係において「主張」となる。しかし、この時の「主張」はまだ内在的であり、他の同意を得る時に社会的法律的关系になる。だが、人が言葉を用いて内的な「確信」を伝達しようとする限り、外的な他者が読み取る「主張」との疎隔（へだたり）は常に発生する。中井はその事態を「嘘言の構造」と考え、「いずれの言か嘘言ならざるといいたいほど、日常及び公的生活は、嘘言に充ちている」という。日常の公的生活は、そのような疎隔を乗り越えようとして乗り越えられない「悲劇性」をもち「嘘言」に充ちているという。続いて第8節は、「確信」と「主張」の嘘言構造から、いわゆる「ライナッハの否定論」を援用した否定機構の説明に入る。ライナッハの同一主観（主体）内部における「確信－主張－同意」に至る過程を、中井は他の主観を含む社会的領域に拡大した。中篇の根幹に位置するのは、池田が論じたように中井のライナッハを援用した言語論だと考える（池田 1988）。ただし、これを中井の言語論が「委員会の論理」に結実したと評価しうる一方、上篇におけるコミュニケーション史的な叙述からの飛躍があり「委員会の論理」全体の論旨を掴み難くしている。そして、第9節、カッシーラーの機能概念を援用しながら技術の論理を説明する。有名な「窓の概念」、実体概念と機能概念の対比はこの節にある。また、『ドイツ・イデオロギー』を連想するような、人間的世界の形成、労働と言語、生産力の構造に関する叙述や技術の論理におけ

る時間論にも言及している。

「委員会の論理（下）」（10～16節）は、いよいよ結論に向けての展開になる。『世界文化』15号（1936年3月号）の表紙には、中井の後に、ホルクハイマーの「現代哲学に於ける合理主義論争」（二）松尾史郎訳述が掲載され、「新刊批評」には、梯明秀による本田喜代治著『コント研究』の書評などが載っている。まずは、第10節から見ていく。上・中篇に論じた内容を要約し、下篇への導入としている。すなわち、技術の論理が生産の論理に転化・組み入れられ、全ての論理の総合として実践の論理が成立するという。第11節、自然の論理が種々の存在対立の一方を決定するのに対して、技術の論理は、「一方より他方へ、他方より一方へと、人間的目的的方向に向かって引き曲げるところの概念構成」だという。そして、技術の論理における人間的な「目的性は具体的に拡大せられ、転換せられ、ついには自ら自己疎外的な様相をもちきたる」。この過程における合理性こそが生産の論理だという。さらに、

封建制度が自らいかなる推移をもって資本制に推移したか、資本制がいかに自らの危機の運命を呈露しているか。その過程に副って、いかに生産関係が生産者自身に取って無関係の勢力となったか（下略）（『世界文化』15 p.15）

として、概念の一般性が自己疎外している過程を今問題とすべきだとする。第12節、ならば、概念の一般性はいかなる様相をもっているのか。中井は技術の論理によって構成される二つの特殊性を提示する。一つは、存在の生産が商品性をもつこと。もう一つは、知的技術の領域においても免れなかった専門性をもつこと。そして、この二つの特殊性が概念の大衆的性格を構成してくると述べて、具体例の説明を次節につなげる。第13節、まず、商品性について、「セメントを売る」例をあげている。すなわち、「売っている」という事態は、「これはセメントであるか」と人間の需要的要求に向かって「問う」ていることだという。「それがこの利潤経済の機構の限界内で、少しでもセメントが付託されている機能に適合しないものがある」と人は買わないことによって実存在の領域から排除する。つまり、「売れないもの」＝存在しないもの（非存在）というプラクシスの論理があるという。そして、生産物はもちろん、「ついには人間すら、すべて売物であり、それが売買価値を失う時、それは、常に非存在の領域に転落する強力なる歪みを受けているのである」という。しかし、「現今の独占資本の段階において」は、大衆は、存在概念の一般性を持ち得ず、単なる表象（イメージ）しか持ち得ない。すなわち、

人間大衆は、その道具的概念の構成の協同性から疎外されて（中略）常に与えられたる生産物に対する表象のみを得て、日常の生活を繰返すことを余儀なくせられるのである。（『世界文化』15 p.17-18）

また、大衆が商品の表象しか持ち得ないなら、商品概念の一般性は誰がもつのか。中井は、フォードの三六型自動車の例をあげ、商品概念の一般性は工場における専門技師の

委員会が独占し、大衆は「ただ歪んだ自動車ぐらいの表象」しか持ち得ないという。このようにして、「技術の論理」の現実由来として、商品はそれらの表象しか持ち得ない大衆から遊離し、概念の商品的性格は無批判性を生む。第14節、次に、中井が12節に提示した特殊性の「専門化によって起こる概念機構」を顧みる。概念の一般性は、①会社専属の技術委員会や②学校・学会および学会研究委員会に付託されるとする。前者①については、前節に言及したように概念の一般性は大衆から遊離する。そして、後者②に関して、「偶然性が残され、むしろギルド的な手工業的機構があてはまる」旧態にある。その遅れた不均衡な体制は「専門化が協同的統一性から遊離する」ことにつながるという。すなわち、概念の一般性の追究には「全人間的相互共同研究」が重要なのに、閉鎖的な非協同性が生じてしまう。第15節、前の11～14節のまとめとして、概念の商品性から生じる無批判性、概念の専門性から生じる無協同性を再提示する。いずれにおいても、大衆は一般性から疎外されて単なる表象だけをもつ。大衆にとって、概念は表象化するだけでなく極端化する。ならば、如何にして概念の一般性を回復し得るのか。中井は、実践の論理を提示する。すなわち、商品性から生じる無批判性に対しては「組織的な審議性」を、専門性から生じる無協同性に対しては「組織的な代表性」を提示する。そして、審議性と代表性の二つの実践性が「実践の論理機構」であり、「ここに集められたる全般的な機能こそ委員会の論理の全貌」だと述べる。第16節、この節は「委員会の論理」の結論部に当たる。審議性と代表性の内容、有名な「委員会の論理」の回帰的かつ無限の進展過程としての下降図式が提示される。ただし、「代表性の組織論は別稿にゆずりたい」として提示されていない。したがって、「委員会の論理」の根幹となる「審議－実践－代表」という各段階のうち、代表に関する説明に弱点が残されている。彼は、まず主体性からスタートして「審議」段階、「現実地盤の反映として」の提案から始める。すなわち、

現象に於ける直接的欠乏性、及媒介的な疎外性は、何等かの形式で大衆的潜勢力として、力として表現を求める。この言語への現勢力としての表現が即この提案に外ならない。（『世界文化』15 p.22）

しかし、提案の現れ方、潜勢から現勢への転化において反映の「歪曲」が有り得る。現実の様々な情勢が大衆的潜勢力の高まりを要する事態であるにもかかわらず、それが無関心という表現形態を取っているなら、その力は他の方向に歪曲されて現勢力となって放散される。その原因は正当な基礎射影が欠如しているからだ。それゆえ、提案は「現象の正確なる正射影」＝模写を前提にすべきだと述べる。中井は、「提案としての反映を第一次的な主体的条件の客観化」とよぶ。なお、彼が用いている「射影」というフッサールの影響を受けた概念に関しても議論点が様々あるのだが、これも深く言及しない。結論の節、中井が主張する下降図式をあえて簡略化し、横向きに表現すると次のように

なる。

審議：主体性－「反映」--→審議 [①提案＝第一次的な主体的条件の客観化、決議]

↓

実践：実践 [②計画＝第二次的な主体の客観的条件化]

↓

代表：代表 [委任・実行] --→「③報告」＝第三次的な客体的条件の主体化

↓ * 「①提案－③報告」の誤差＝歴史進展のプロペラ

「④批判」＝第四次的な客体的条件の主体化 --→ (主体性－「反映」--→審議 [⑤提案])

この「批判」から次の「提案」につながる再生産的なサイクル (①→④→⑤ [①]) に関して、中井はこう説明する。

批判を通して、主体性は、真に自らの根底に潜って、－subject－新たな第五次的な提案へ、即再び主体的条件の客体化の基体として、自らの腰を一層沈めるのである。第一次的な提案より、この第五次的な提案への回帰、そこに主体性の意味があるのである。そして、この客体を媒介として、主体が主体自らの基礎の具体化へと向かうこの過程が、また、実践の論理のもつ完結性である。かくて、委員会の論理は、一つの回帰的でありながら無限進展の過程として自らを図式化するのではあるまいか。(『世界文化』15 p.23-24)

そして、この「委員会の論理」の図式自体も思惟的な図式としては完結しない一つの「提案」だとする。ただし、下篇を通じて、中井の説明は比喩的な表現と繰り返しが多く、判りやすい文章とは言い難い。あえて、結論部を約めていうと次のようだ。現実の反映としての「提案」から議論(肯定・否定・修正)を経て「決議」し、実践のための「計画」が立てられ委任・実行する。その結果の「報告」が「批判」を通して次の高次な提案につながる。一連の図式は、主体的条件から主体的条件への回帰による深化として把握され、主体性は、自らを媒介へと転化する弁証法的な意味をもつ。

3. 2 コミュニケーション・言語・主体性

前節において、大雑把な要約に過ぎないが、『世界文化』に掲載された「委員会の論理」の展開を概観した。中井が「委員会の論理」の導入部に提示した「論理」を捉える視点は唯一つ。つまり、論理はそれ自体、永遠に続く特別な世界を構成しているとする考え方への異議申し立てであり、むしろ、論理は歴史的な各時代における「文化的現象」＝現実に基礎を置いているという視点だ。また、「委員会の論理」のもう一つ特徴的なのは、中篇の要約に言及した通り中井の言語論を引き継いでいる点だ。一見、上篇の論理学史スタイルから中篇の言語論への飛躍は、「委員会の論理」を判り難くしている要因だと

思える。だが、逆に、論文の基底に言語論があることから「委員会の論理」を「コミュニケーション史」の試みとして捉え直す可能性があると考え。それは、様々な社会的・文化的な文脈において生起する「人間」のコミュニケーションが、主として言語によるコミュニケーションだからだ。もっとも、『ドイツ・イデオロギー』の言語に関する記述、さらには、同書が同時代ドイツの思想に対するコミュニケーション（言語的・精神的な交通）論的批判だと評価した鶴見の論（鶴見 1973）に立ち返って論点を整理する余裕はない。ただ一点、コミュニケーション（communication）の語源に遡って見るなら、ラテン語の“communis”（共有性）が原義だという点に注目しておきたい。「コミュニケーション」は、ある二者間に何か「移動」して、両者の間に共通な何かを作り上げていく活動、という定義もあるが（稲葉 1989 6-7）、本稿は「共有」という語源の意味に注目しておきたい。「移動」ということを強調すると、ウィーバー・シャノンらの通信伝達モデルを想起し易く、言語は意味伝達的手段とだけ捉えられ、人間の生活における意味連関や関係性を見落としてしまうからだ。

そして、「委員会の論理」の可能性を探るもう一つの注目点は、人間「主体」をどう把握するのかという点だ。主体概念は、人間のコミュニケーション（史）を対象とする限り避けられない問題に違いない。もちろん、中井自身も「Subjektの問題」（『思想』1935年9月号、全集1 21-45）と題して、一般に「主観あるいは主体といっている言葉」の様々な発展的段階を素描的に論じている。また、その論点が「委員会の論理」の叙述に反映しているのは前節に見た通りだが、「委員会の論理」の可能性を探るためには、中井が論じた主体概念を一度、相対化すべきだと考える。とはいえ、一般的な思想史における「自己-他者」といった主体を巡る議論は、最早、本稿が扱う課題の範囲を越えてしまう。したがって、本稿は、「委員会の論理」をコミュニケーション史の視点から捉え直すために有効と考える内山節の時間論的な主体論に言及しておきたい。前稿、「西欧的なローカリズムの普遍化」を扱った際に言及した内山節は、『時間についての十二章』において『ドイツ・イデオロギー』の共同体論を取り上げながら、1930年代も含め人間主体や労働過程を時間論の視点から論じている（内山 1993）。中井が概念の自己疎外や極端化に注目し、「委員会の論理」を展開していったのに対して、内山は時間世界の変容＝存在そのものの変容に注目する。「委員会の論理」自体が動的な無限に下降・深化していく図式を提示しているにも拘わらず、実はそこに時間論的な視点がない。それゆえ、中井の主張内容が、主体性は自らを媒介へと転化する弁証法的な意味をもつ動的方向を提示しているのに反して、主体性の概念は時間論的な変容を欠いた静的な把握に終わっている。

ただし、内山の時間論に関して詳しく要約化する紙幅はない。「委員会の論理」との関連から、時間論と主体に関する要点だけ見ておきたい。中井は「委員会の論理」（下篇）

に、フォードの三六型自動車の例をあげ、商品概念の一般性は専門技師の委員会が独占し、大衆は、歪んだ自動車ぐらいの表象しか持ち得ないと述べた。内山は、同じようにT型フォードを生んだフォードや「科学的管理法」の発案者、F. W. テーラーを取り上げながら、ベルトコンベア導入による労働者の労働速度の支配、つまり、労働「時間」管理に注目する。そして、資本制経済社会が時計の時間を価値基準にして形成されているという。現代からすると時間に関する社会史のような説明は、一見、当り前のことだろう。しかし、「時計の時間」は、特定時代・社会の基礎にある特殊な時間秩序の象徴に過ぎず、時間世界の特殊性に気づかない限り、例えば、現代社会の特殊性に気づかないとする。しかも、人間の存在はこの不可視な時間秩序の拘束され続けている時間的な存在だという。また、時間が存在するには関係が生じなければならないという。確かに、地球の公転によって一年の時間が生まれ、自転によって一日の時間が成立する。だが、それだけなら歯車が回転しているだけであり、時間が存在するとはいえない。時間が存在するには関係が生じなければならない。すなわち、無機的な時間との間に関係が結ばれることによって「存在」としての時間が発生するのだという。それゆえ、ある特定社会はある特定の時間秩序を基礎にしてつくられたひとつの構造だとするなら、この時間秩序に従って人間主体もまた存在している。けれども、従来の西欧思想は、時間を扱っていても内部に時間の思想を取り込む視点を欠いてきたという。フッサール、ベルグソンにせよ、ヘーゲルそしてマルクスにせよ然りだという。内山の主張を援用するなら、ある歴史的な社会の基礎には、特定の時間秩序があることになる。しかも、人間「主体」はその時間秩序に従って存在する。それゆえ、社会の基礎にあるとする特定の時間秩序は、「委員会の論理」を「コミュニケーション史」として把握する際に有効な視点となる。また、中井が「委員会の論理」(第16節)に提示した下降図式、主体が自らを媒介へと転化し弁証法的に深化していくはずの論理も、主体が同じ時間秩序を前提として存在している限り変容も深化もしない、といえるだろう。

まとめに代えて

本稿は、前に提示した中井正一「委員会の論理」がコミュニケーション史の構想として、今、どう読み込めるのか、その可能性を論じた。「委員会の論理」自体の内容展開に関しては、参考とすべき先学の諸論考が多くある。だが、「委員会の論理」をコミュニケーション史の構想として見直す際、念頭にあったのは、竹内成明『コミュニケーション物語』(1986)と稲葉三千男『コミュニケーション発達史』(1989)の二著だった。竹内は「あとがき」に、稲葉は序論に「委員会の論理」を取り上げている。なお、稲葉は、「委員会の論理」に言及されているタルド (Tarde, Gabriel de, 1843-1904)『世論と

群集』(L'opinion et la foule) の日本における訳者でもあった(タルド 1964)。

また、「委員会の論理」をコミュニケーション史の構想として捉え直す視点として、内山節の『時間についての十二章』に展開した時間論を取り上げた。「委員会の論理」に内山が論じた「社会の基礎にある特定の時間秩序」の視点が加わるなら、あらたなコミュニケーション史像が提示しうらと思ったからだ。さらに、竹内が「委員会の論理」論じた際の「コミュニケーションの傾向性」(竹内 1980) は、内山の時間論を軸にしてコミュニケーション史的な再考の可能性があるように思う。もちろん、如何にして歴史的な「時間秩序」を把握するのか、それを基礎にした社会に暮らす主体をどのように捉えるのか、問題は様々ある。それらは、今後の課題としておきたい。

【註・参考文献】

引用に関して、現行の常用漢字体を使用し、原文の傍点・ゴシック体などの強調は省略した。文中、典拠を辿りやすいように「人名 発行年 ページ数」としても表現した。また、『中井正一全集』からの引用は、「全集 巻数 ページ数」としたが、「委員会の論理」に関する引用は『世界文化』復刻版の文章を採用した。本文中、外国人名のカタカナ表記は、『岩波西洋人名辞典』(岩波書店、1981年増補版) および『岩波哲学・思想事典』(廣松渉 [ほか] 編、岩波書店、1998年) に依った。両書の表記が異なる人名に関しては、主題の関係から後者の表記を採用した。

馬場俊明『中井正一伝説：二十一の肖像による誘惑』東京、ポット出版、2009、453p.

* 別稿(中村 2008) に触れた中井正一の総合的な人物史論への希求については、別稿のすぐ後、馬場氏による伝記が上梓された。本稿の論旨には直接関係しないが、中井と仏教思想との関連など丹念な調査に基づいた文章から教えられる点が多くあった。

ブチァー, S. H. (田中秀央, 和辻哲郎共訳)『希臘天才の諸相』東京、岩波書店、1923、444p.

江藤文夫 [ほか] 編『コミュニケーション思想史』東京、研究社出版、1973、301p.

* 『講座・コミュニケーション』の第1巻として編集されたこの文献は、鶴見俊輔が編集担当。なお、同巻の3部(p.[61]-194) に収録されている下記の諸論稿は、「委員会の論理」におけるコミュニケーション史的内容の展開形と読めるようなテーマ構成になっている(カッコ内は執筆著者)。これら1970年代の諸論考は、現在、等閑視されている感があるけれども再考に値するテーマ群だと思う。

「アテナイの民主制とプラトンのコミュニケーション論」[井上俊]

「教会とアウグスティヌスのコミュニケーション論」[井上俊]

「商業的世界のコミュニケーション形態とアダム・スミス」[竹内成明]

「ルソーあるいは直接的コミュニケーション」[松本勤]

「社会主義運動のコミュニケーション論—ブルードンとマルクス」[竹内成明]

「ボードレール・想像力の反抗」[松本勤]

「帝国主義への抵抗とガンジーのコミュニケーション論」[竹内成明]

「中国文化大革命のコミュニケーション」[山本明]

ホルクハイマー, マックス(久野収訳)「現代哲学における合理主義論争」『哲学の社会的機能』東京、晶文社、1974、p.189-240.

*久野による訳述は、上記文献に再録されている。また、久野によるホルクハイマーらフランクフルト学派の補論も付されており、フランクフルト学派の大衆文化論、特にジャズ音楽を正面からアカデミックに扱った論文に会い、中井正一とともに印象深かったと回想を述べている。稲葉三千男『コミュニケーション発達史』東京、創風社、1989、273p.

*「第一講序論コミュニケーションの定義および発達段階」(p.3-19)、「委員会の論理」に言及している。

カッシーラー, E. (山本義隆訳)『実体概念と関数概念』東京、みすず書房、1979、448p.

葛西弘隆「委員会の思想：中井正一における合理主義と主体性」『国際関係学研究』2009、(36)、p.47-58.

木下長宏『中井正一：新しい「美学」の試み』東京、リプロポート、1995、255p.

木下長宏「和歌のイコノグラフィ：もう一つの韻律」『國文學』2006、51(9)、p.50-58.

郡定也「中井正一研究の視点」『キリスト教問題研究』1966、10、p.130-144.

香内三郎「交通」『マス・コミュニケーション事典』南博監修。東京、学芸書林、1971、p.229-231.

古在由重、丸山眞男『一哲学徒の苦難の道』東京、岩波書店、2002、229p.

久野収「マックス・ホルクハイマー：集団的抵抗の思想」『哲学の社会的機能』東京、晶文社、1974、p.241-249.

マンゲル, アルベルト (原田範行訳)『読書の歴史：あるいは読者の歴史』東京、柏書房、1999、354p.

マルクス, エンゲルス著, リヤザノフ編 (三木清訳)『ドイッチェ・イデオロギー』東京、岩波書店、1930、140p.

中井正一「委員会の論理 (上)」『世界文化』1936. 1, 13, p.2-17. [内容：第一節～第五節]

中井正一「委員会の論理 (中)」『世界文化』1936. 2, 14, p.16-33. [内容：第六節～第九節]

中井正一「委員会の論理 (下)」『世界文化』1936. 3, 15, p.2-17. [内容：第十節～第十六節]

*上記は、『世界文化』同人編、『世界文化』(復刻版第2巻、小学館 1975)による。

中井正一 [著], 久野収編『哲学と美学の接点』東京、美術出版社、1981、471p. (中井正一全集 第1巻)

中村保彦「貸本のコミュニケーション史2」『貸本文化』1991、18、p.45-52.

中村保彦「中井正一と図書館のコミュニケーション」『同志社図書館情報学』2008、19、p.11-33.

中村保彦「中井正一と『土曜日』のジャーナリズム」『同志社図書館情報学』2009、20、p.94-106.

佐藤進一『古文書学入門』東京、法政大学出版局、1971、322p.

『世界文化』同人編『世界文化』復刻版。東京、小学館、1975、3冊。

*各巻の収録号数は下記の通り。

1巻：1-12号 (1935年2～12月)

2巻：13-24号 (1936年1～12月)

3巻：25-34号 (1937年1～10月)

セルトー, ミシェル・ド (山田登世子訳)『日常実践のポイエティック』東京、国文社、1987、452p.

シャルチエ, ロジェ編. (水林章 [ほか] 訳)『書物から読書へ』東京、みすず書房、1992、374p.

シャルチエ, ロジェ; カヴァッロ, グリエルモ編 (田村毅 [ほか] 共訳)『読むことの歴史：ヨーロッパ読書史』東京、大修館書店、2000、634p.

*シャルチエの論点整理に関しては、宮下の文献を参考にした。

宮下志朗『書物史のために』東京、晶文社、2002、269p.

竹内成明『闊達な愚者：相互性のなかの主体』東京，れんが書房新社，1980，267p.

竹内成明『コミュニケーション物語』京都，人文書院，1986，299p.

田中義久「交通」『コンサイス20世紀思想事典』第2版．木田元〔ほか〕編．東京，三省堂，1997，
p.364-365.

タルド，ガブリエル（稲葉三千男訳）『世論と群集』東京，未来社，1964，266p.

戸坂潤「イデオロギー概論」『戸坂潤全集2』東京，勁草書房，1966，p.95-222.

戸坂潤「日本イデオロギー論」『戸坂潤全集2』東京，勁草書房，1966，p.223-438.

*『日本イデオロギー論』は岩波文庫（1977）としても刊行されているが、本稿の引用は全集に
依った。

戸坂潤「現代哲学講話」『戸坂潤全集3』東京，勁草書房，1966，p.105-218.

鶴見俊輔「マルクス主義のコミュニケーション論」『鶴見俊輔著作集第1巻』東京，筑摩書房，
1975，p.420-439.

内山節『時間についての十二章：哲学における時間の問題』東京，岩波書店，1993，293p.

和辻哲郎『人間の學としての倫理學』第20刷改版．東京，岩波書店，1951，253p.

*1章11節「マルクスの人間存在」などの叙述

和辻哲郎『風土：人間学的考察』改版．東京，岩波書店，1963，253p.

山本武利「特論マスメディア論」『岩波講座日本通史18巻』東京，岩波書店，1994，p.[289]-303.

（なかむら やすひこ。2011年8月31日受理）